



TITLE:

歸有光の文學：所謂「唐宋派」の再 検討

AUTHOR(S):

田口, 一郎

CITATION:

田口, 一郎. 歸有光の文學：所謂「唐宋派」の再検討. 中國文學報 1997, 55: 21-60

ISSUE DATE:

1997-10

URL:

<https://doi.org/10.14989/177805>

RIGHT:

歸有光の文學

——所謂「唐宋派」の再検討——

田 口 一 郎

京都大學

はじめに

歸有光（字熙甫、號震川、一五〇六—一五七二）は、明代中期、「天下推李・何・王・李爲四大家、無不爭效其體」（『明史』卷二八六、李夢陽傳）というように李夢陽、王世貞等の「前後七子」による古文辭派が文壇を席卷した時代にあつて、王慎中、唐順之、茅坤などとともに唐宋の古文を規範とした文學を目指した「唐宋派」の文學者として知られており、この評價は概ね定着したものと思われる。そして歸有光といえは「項思堯文集序」（『震川先生集』卷二）に於ける「妄庸人」論争^③によって、とかくその文學流派對

歸有光の文學（田口）

立が注目され、彼は「唐宋派」の領袖と捉えられている。

その「唐宋派」の中で、明代では「王・唐」として歸有光よりはるかに評價された王慎中、唐順之^④は、清代以降、歸有光程の評價の高さはない。清朝初め、既に黃宗羲は、當時の風潮を記して、

近時文章家、共に歸震川を推して第一と爲す^⑤（『南雷文

定三集』卷一「鄭禹梅刻稿序」）

議者震川を以て明文第一と爲す、似たり^⑥（『南雷文定前集』卷一「明文案序上」）

と、明代第一の作家としての歸有光評價を示す。

又のち清の文壇の主流となる桐城派では、歸有光のみをその第一の祖とし（劉聲木『桐城文學淵源考』）、また錢謙益（『有學集』卷一六「新刻震川先生集序」、方苞『望溪先生全集』卷五「書歸震川文集後」）など、清代を代表する多くの文學者が彼に關する文章を記す。その評價は例えば、林紓が、歸震川は明代文章の宗匠爲り^⑦（『春覺齋論文』述旨六）などというように、清末に至るまで非常に高いものがある。これに對し、明代では評價の高かった王慎中、唐順之は、

例えば桐城派では、殆ど顧みられてはおらず、清代を代表する古文選集『古文辭類纂』は歸有光作品を三十二編も採録しているにもかかわらず、王慎中、唐順之の作品を全く採録していない。

なぜ歸有光だけがこのように特別な評價を受け、「王唐」と呼ばれた王慎中、唐順之と逆轉して評價されるようになったのか。當然それは歸有光のみが、「王唐」には無い何か特殊な文學性をもっていたからであるはずだが、それは一體どの様な性質のものであったのか。歸有光の作品の検討を通して考えていこう。

一 歸有光の作品の性質

その抒情の構造

まず文學者としての歸有光は、如何なる作品が評價されてきているのか。

方苞は『書歸震川文集後』（卷五）において、震川の文、郷曲に應酬する者 十に六七にして、又た請者の意に徇^{したが}い、常を襲い瑣を綴り、俗言より大い

に遠ざかると欲すと雖も、其の道 由る無し。其の親舊及び人微にして語忌む無きに發する者は、蓋し古に近きの文多し。事 天屬に關するに至りては、其の尤も善き者、修飾を挨たずして、情辭 並び得、覽る者をして惻然として隱^{ひた}むこと有らしむ。^⑧

と、人の要請によつて作られたものとはともかく、身近な人物、特に親族に關する文で、とりわけ情感豊かな作品を描くと評價している。

こうした評價は現在でも同様で、歸有光の文は「簡潔をきわめ」「身邊の瑣事を寫して精彩を帶び」、「抒情性は、……特に家族の事を記して、いつそう香り高くきわまる」（本田濟、都留春雄『近世散文集』中國文明選10、一九七一、朝日新聞社、八五頁）であるとか、「その中の敘事の文は、品格の上から言えば、素朴で簡潔であることを重視し、……題材の上から言えば、日常の交友、身邊の瑣事から多く筆を執り、人に清新の感をあたえ、家の者、父子、夫婦の情ということになると、感銘深く、人にもとりわけ深く訴えかける」^⑨（黃明注譯『歸有光散文選』（中國歷代散文作家選集）

一九九一、(香港)三聯書店)であるといったもので、ほぼ定論を見ていると言つてよい。

そこで彼の文章の特徴をまとめると、大きく以下の四つの特徴があることが分かる。

一、「敘事」の文に優れたものが多い。

黄宗義は、「明文案序上」「南雷文定前集」巻一で、試みに其の敘事の合作を除去せば、時文の境界、閒ま或いは闡入す。之を宋景濂に較ぶるに尙お及ぶ能わざるなり。^⑩

と述べる。これは逆に言えば時文の影響が無い敘事^⑪の文に、合作(規範になつた作品)があることを指摘している。

實際、歸有光の評價の高い作品は、そのジャンルに、ある偏りが見られる。その一例として姚鼐『古文辭類纂』に採られている歸有光作品のジャンル別の數を擧げてみると、次のようになる。

論辨0：序跋2：奏議0：書說0：贈序8(内、壽序4)：詔令0：傳狀7：碑誌7：雜記8：箴銘0：辭賦0：哀祭0

歸有光の文學(田口)

姚鼐が、論辨、奏議、箴銘などの分野では一編も取らず、採録分野が、贈序、傳狀、碑誌、雜記といった分野に固まっていることには、注目してよいだろう。歸有光は人生の大部分を科擧の受験生として在野に過ごしたため、論辨、奏議が少ないのは當然とも考えられるが、彼は短かつたとはいへ官僚經驗もあり、事實彼の文集には姚鼐が採録しなかつたそうした分野の作品も收められている。こうしたことを考慮すれば、彼の評價されているジャンルが、人に對して自己の意見や抽象的な考えを述べたりする論辨・奏議などの文では無く、ある事柄を選択しその経緯を記録してゆく「敘事」の文だという、大まかな傾向がつかめよう。事實、我々が歸有光の作品として、眞先に思い浮かぶのは「思子亭記」「項脊軒記」(以上卷一七)「亡兒齔孫墳誌」「女如蘭墳誌」「女二二墳誌」「寒花葬誌」(以上卷二二)「先妣事略」(卷二五)など、ある人物や事物を記念、記録するような作品が多いのである。

二、取材範圍の狭さ

以上のような作品群においても一つ氣付くのは、その

取材範圍の狭さである。

歸有光の進士合格は、六十歳と當時としても非常に遅く、それまでは郷里の崑山、或いは隱居先の安亭に暮らし續けた。それ故、作品に書かれる内容は、郷土周辺の事跡、また墓誌銘であれば身近な人物に、概ね限られる。一般に、墓誌銘の題には官職名が付されるが、彼の書いた墓誌銘の題には官職名が付されず單に「……君墓誌銘」となっているものが多い。又、『古文辭類纂』に採られる傳記作品の半分近く（十四篇中六篇）が親族に關するものであることも、その佳作の取材範圍の狭さを裏付けよう。

さらに取材對象について言うなら、女性や年少者、また身分の低いもの（『寒花葬誌』の家奴）など、一般には作品の書かれることの少ない對象にも作品が書かれ、それが評價されている（『古文辭類纂』に採られる傳記作品の十四篇中七篇が、女性に對するもの）ことも注意したい。

三、自分に對する關心の強さ

先に引用した方苞は、「其の親舊及び人微にして語忌む無き」ものや「事 天屬に關する」もので歸有光の文は優

れるという。つまり先に題材の狭さと書いたが、歸有光の場合、單に取材對象が狭いだけではなく、その對象が自分と關係深ければ深い程、趣深い作品になっているということが言える。

歸有光の情感豊かと言われる作品に於いては、その形式には一定のパターンが存在する。即ち、自分の身近なものを「自分が」喪失したことを悲しむ、というかたちである。後に述べる「女二墳誌」でいえば、その記載の中心は、「自分が」娘の死を知らされた時の衝撃であり、「寒花葬誌」でいえば、その中心は「自分が」十年前の楽しい暮らしを喪失した悲しみであり、そこでは彼らの死の苦しみではなく、「自分の」喪失の悲しさが表現されている。これについては、後に詳しく見ることにする。

四、細かい事實描寫による、抒情性の表出

こうした狭い生活世界の中、身の回りの必ずしも社會的地位の高くないものを題材に採った場合、その内容は、官位の變遷など記すべき社會的事跡が少ないため、特徴的ではあっても些細な日常のエピソードが中心となる。

黄宗義は、「張節母葉孺人墓誌銘」〔「南雷文案」卷八〕で從來碑誌の法、類ね一二の大事を取りて之を書す。

其の瑣細尋常なるものは皆な畧して論ぜず。而るに女婦の事、未だ瑣細ならざる者有らず。然らば則ち竟に書く可き者無し。就い節婦の如きも、只だ節の一字を加うれば足れり。其の餘は亦た皆な瑣細なり。是くの如くして何を以てか文を爲さんや。^⑫

と、婦女に關する碑誌の文では、必然身近で些細な出來事を書かざるを得なくなことを指摘する。黄宗義は續けて、歸有光の作品の女性について書かれたものを評價して、

予 震川文の女婦の爲にする者を讀むに、一往深情、毎に一二の細事を以て之を見し、人をして涕せんと欲せしむ。^⑬

と述べ、歸有光の作品が「一二細事」によつて書かれてゐることを示す。この場合、その文は、個人の生活に即した具體的描寫が多いものとなるのは勿論である。そしてそれは、社會的な機能的存在としての人間ではなく、日常的な個人としての人間の描寫にもつながる。姚鼐は、

歸有光の文學（田口）

歸震川 能く不要緊の題に於いて、不要緊の語を説い、却つて自ら風韻疏散たり。^⑭（與陳碩士九六首 其四六）

〔惜抱尺牘〕

と、歸有光が何でもない出來事を、何でもない言葉によつて表現することで、却つて趣のある作品に仕立て上げてゐることを指摘する。

*

では實際に歸有光の作品の具體例をいくつか検討し、上に述べた特徴を見ていくことにしよう。まず「寒花葬誌」

（卷二）

婢は、魏孺人の媵なり。嘉靖丁酉五月四日死し、虛丘に葬る。我に事えて卒えず、命なるかな。

婢初め媵たりし時、年十歳、雙鬢を垂れ、深緑の布裳を曳く。一日、天寒く、火を熱き^た勃^{はう}齊^{せい}を煮て熟す。婢之を削りて甌に盈つ。予外より入りて、取りて之を食らいしに、婢持ち去りて、與えず。魏孺人、之を笑う。孺人、毎に婢をして几旁に倚りて飯せしむ。飯に即かは、目^{もく}眶^{くわう}冉冉として動き、孺人又た予に指さし以て

笑いと爲す。

是の時を回想すれば、奄忽として便ち已に十年。吁、

悲しむべきかな。^⑮

自分の召使に對してこのように葬誌（墓誌の一種）を書

くことは、非常に稀なことで、自分の身近のものに對する
歸有光の細かい觀察眼が、よく表された作品だと言える。

第一段で寒花の死亡の事實が述べられるが、召使の葬誌
である故、勿論履歷等が述べられることはなく、その死は
「事我而不卒」というように、寒花自身の在り方ではなく、
歸有光にとつての寒花の在り方として捉えられる。

第二段で寒花が生きていた時の一二のエピソードを、筆
者の感想を交えず客觀的に描寫する。ここで重要なのは、
そのエピソードが寒花の人生にとつて大切なものではなく、
歸有光にとつて思い出深いものが採り上げられている、と
いうことである。そしてここでの思い出は、幸せな回想で
ある。

そして、第三段で時間を跳躍し、現在から過去を回想す
ることで悲しさを表現する。直接的な感情表現はここで初

めてなされる。しかし、注意しなければならないのは、そ
の際の十年前という時點は、寒花にとつてではなく、歸有
光にとつて、魏氏が嫁いで來たという意味で重要な時點だ、
ということである。もしこの作品がただ寒花の死を悼むも
のであれば、十年前の寒花の様子ばかりでなく、最近の寒
花の様子、また寒花の死の状況なども書くべきであろう。
つまり、ここで歸有光の悲しんでいるのは、寒花の死それ
自體というよりは、むしろ十年前の妻や寒花との幸せな状
況が失われたことであることがわかる。

「女三墳誌」卷三二

女三二、生るるの年月、戊戌の戊午、其の日時も又た
戊戌の戊午にして、予以て奇と爲せり。

今年予 光福山中に在り、三二予を見ざれば、輒ち常
常に予を呼べり。一日、予山中より還り、長女の能く
其の妹を抱くを見、心に甚だ喜ぶ。予の門を出づるに
及び、三二尙お躍りて予の懷中に入れり。

既に山に到りて數日、日將に晡れんとするに、予方に
尙書を讀めり。首を擧げれば忽ち家奴の前に在るを見

る。驚き問いて曰く「事有るか」と。奴 卽言せずして、第^ただ他事を言う。徐^{おもむ}ろに却^{しりぞ}き立ちて曰く「二二今日四鼓の時、已に死せり」と。蓋し生まれて三百日にして死す。時に嘉靖己亥三月丁酉爲り。予既に歸りて棺斂を爲し、某月日を以て、城武公の墓陰に瘞む。嗚呼、予乙未より以來、多く外に在り、吾が女の生れしを既に知らず、而して死も又見るに及ばず。哀しむべきかな。^⑩

第一段は、生まれの説明。しかし、生まれるに當たつての経緯や生まれた時の實際的狀況に關しては何も述べられず、二二とは稍距離を置いた立場から、二二が生まれた干支の不思議な一致を簡潔に示すのみである。

第二段で二二の描寫がされるが、實はこの文章で實際の娘の姿を描いているのは、この部分だけである。この思い出はやはり娘の自分へのかかりかたであり、喜ばしい思い出である。

第三段では、二二自身の行爲については何も觸れられておらず、第二段の生き生きとした描寫から突然時間が下り、

歸有光が召し使いから知らされるといふかたちでその死が表現される。そして、實はこの部分がこの墳誌の中心部分となる。

第四段で、娘が生きていた時點、娘の死を知らされた時點、墓に葬った時點、から書いている現在に時間が跳躍され、そして初めて「可哀也已」と悲しみの表現が述べられる。

文章中では、亡くなつた娘に對する哀惜の念が表現されるが、彼女が生きていた時の歸有光は「予在光福山中」「多在外、吾女生既不知」と娘に殆ど構うことをせず、死んだ後になつて初めて、失われた過去を哀惜するという構造であることが分かる。

つまり歸有光はこうした作品で、故人の事跡を時間的に羅列して描くのではなく、その中で先ず自分に結び付けうるものを選択し、そして後からそれを失つた悲しさを述べているのであり、娘の所爲を問題にするのではなく、自己と被記述者との關係を重視していることが分かる。

また、歸有光の散文は抒情的と言われるが、その書き方

は、「情自體を敘述」したのではなく、以上のようにその構造は心情描寫を極力排除した「敘事」の文である點でも特色がある。

「女如蘭墮誌」 卷三

須浦の先塋の北に、纍纍たる者は、故の諸瘍の冢なり。坎の方封に新土有る者は、吾が女如蘭なり。死して之を埋めし者、嘉靖乙未中秋の日なり。女生まれて周を踰え、能く予を呼べり。嗚呼、母微にして、之を生むこと又た艱し。予其の母有るを以て、甚だしくは撫を加えず、死に臨みて、乃ち焉に一抱せり。天果して其の是くの如きを知りて、而も之を生ましむれば、奚爲れぞや。^⑬

この文も、如蘭自身については「女生踰周、能呼予矣」位しか書かれず、それ以外は歸有光の如蘭に對する關わり方を書いたものである。更に現實での歸有光の如蘭に對する關わり方を考えてみれば、妾の子という理由もあつてあまり構わず、死ぬ間際になつて初めて一回抱いただけ、と記されるのみである。そして悲しみを表す言葉は、この

場合も「嗚呼」位しか無い。

身邊の瑣事を心理的解釋を極力排して敘述することにより、表現をかえて含意的なものとし、讀者に感動を與えろといったように、この手法は解説できる。しかし、その説明では何故こうした事實描寫をすれば、より含意的になり抒情性豊かな作品となるのかの、根本的な説明にはなつておらず、更に何故それが歸有光の特色となり、他の者に眞似ができないのか説明がつきにくい。

例えば歸有光を祖と仰ぐ桐城派の文學者たちは、彼のような淡々とした筆法を模倣したが、彼のように抒情性豊かな作品をなしたとは評價されない。黃宗羲が、

今の震川を學ぶ者は、其の神を得ずして、之を枯淡に求む。^⑭〔文約〕卷四、〔文定三集〕卷一「鄭禹梅刻稿序」

と述べ、呂新昌氏が「桐城派の疎淡は、確かに震川先生から出たものである」が、「桐城の文は情感が十分豊かだとはいえない」^⑮點などで、歸有光の文と異なっているとするのは、何れも歸有光の文に、抑制を効かせた表現法という以上の、何らかの特色があることを裏付ける。

では歸有光の文は、何故抒情的であるのか。

以上見てきた例、また歸有光の作品は一般に、現在の生活の楽しさを記したものは非常に少なく、彼の意識は、何らかの事件（そしてそれは多くの場合、幸せな事柄である）の起こった過去へと向かっていることに氣付く。

これまで舉げてきた例では「寒花葬誌」での寒花の十年前の愛くるしい動作、「女二三壙誌」「女如蘭壙誌」での自分を慕う二二、如蘭の生前の姿、などがそうである。

過去に對する執着を持っていない人間というのは、まずいはいはずで、どんな人間でもできることなら、(1)不幸な過去をやり直したい、(2)過去の幸福を取り返したい、という願望を持つているはずである。しかし、それはどんな人間にも不可能なことで、必ず(1)遺恨、或いは(2)喪失の悲しみ、といった形で残る。

歸有光の文學は特にこの第(2)の點に訴える故に、抒情的なのだと考えられる。

上で見たように、歸有光の作品は先ず感情表現を極力抑えたかたちで、過去の描寫を選択的に行う。そこで歸有光

歸有光の文學（田口）

が描くのは、母が生きていた時代（「先妣事略」）であり、自分が有望な少年であつた時代（後述「項脊軒記」）であり、妻が生きていた時代（「寒花葬誌」）であり、娘が生きていた時代（「女二三壙誌」「女如蘭壙誌」）であるが、それに對し書いている現在は幸せな時代ではない。

我々は取り返しのつかない過去の記述を読めば、それだけでも物悲しさを感じる。これは無意識のうちに、現在に自分を置いた立場から過去が失われた喪失感を味わうからであるが、こうした形は他の文學者の場合でもそれほど珍しくはない。

歸有光の場合、ここで有効に使用されるのが、場面の階層化の手法である。つまり、書き手である現在の自分の立場をどこかに示すことによって、平面的な過去の記述に段差を與え、また逆に過去の部分の記述を過去の記述としてはっきり制限する手法をとるのである。

彼は初めに、回顧的表現を避けて書き手の現在の立場を明らかにせず、過去の記述を行うことによって、先ず讀者を過去の世界に置く。これは時制が必ずしも明確ではない

という中國語の特性を生かしたものとも言え、その過去の記述は、文體としては明確に過去として示されず、恰も現在の状況の記述であるかのように記される。そして多くの場合、次に突然時間を示す語を伴って、それまでの記述は過ぎ去ってしまった過去の事象であつた、と種明かしされる。

先の例で言えば「寒花葬誌」の「是の時を回想すれば、奄忽として便ち已に十年。吁、悲しむべきかな」、「女「二二」墳誌」での「二二今日四鼓の時、已に死せり」などであり、こうした時間の落差を示す方法は歸有光の作品に間々見られる。

「筠溪翁傳」卷二六では

噫、余 翁に見えし時、歲暮、……余去きし徑に循いて家に還るに、媼・兒子 遠客の至りしを以て、酒を具し、余の書を挟みて還りしを見て、則ち皆な喜ぶ。

一、二年、妻兒皆な亡くなれり。^㉑

と、家族が自分の歸りを喜ぶ幸せな状況の直後に、「二二年」として妻子が今はいない、という現在の不幸な状況を

述べる。又他に「見村樓記」卷一五でも

城外に橋有り。余常に中丞と郭を出で、故人の方思曾に造る。時に其の不在なれば、相い與に檻に憑り、常に暮に至りて、悵然として反る。

今、兩人は皆な亡くなれり。延實の樓は、即ち方氏の故廬なり、予能く感ずることなからんや。^㉒

と、過去の中丞（李憲卿）や方思曾との思い出の描寫から一變して、二人が亡くなつてしまつてゐる現在を描き、その落差から取り戻せない過去への思いを表現するという形式を取る。

この時我々は、歸有光と共に取り返しようなない過去から現實に直面しなければならない現在へと確實に引きずり戻され、そこに過去に止まっておれない人間の悲しみを感ずる。言い換えれば歸有光の文の悲しさは、必ずしも彼の愛情深さなどからきているものではなく、時間の跳躍により理想的な過去の世界が失われるその様が、はかなく悲しいのであり、彼の娘が死んだ痛ましさが悲しいなどといったものではない。

そして、彼の敘事的といわれ、感情表現の少ない文體の秘密も、ここにある。つまり、彼が過去の世界を描くとき、彼はその世界の事項を選択的に書くことはできるが、現在と過去との記述の階層を保つためには、過去の記述の中に現在の感情、判断を持ち込むことは、できないのである。それ故、彼は過去の記述部分では變えようのない事實描寫に終始し、「哀」「悲」等の悲しみの感情表現を用いる場合は、過去の世界ではなく、戻ってきた現在の時間の中で多く使用するのである。

さて、歸有光の場合さらに、彼が描く過去が、多く彼が幸福であった時點としての過去であることは重要である。ここに彼の作品の抒情性が美しく可憐なものである秘密がある。

例えば碑誌の文ではないが、韓愈「祭女挈女文」(『朱文公校昌黎先生集』卷三三)の場合、十二歳で死んだ娘を祭る文で、抒情的な作品ではあるが、歸有光のものとは全く趣を異とする。

……嗚呼、昔、汝が疾、極まりしとき、吾が南に逐わ

るるに値う。蒼黃として分散して、女をして驚き憂えしむ。……我れ既に南に行き、家も亦た隨いて譴わる。汝を扶けて輿に上らしめて、走ること朝より暮に至る。天雪ふり冰寒たくして、汝が羸肌を傷る。險阻に撼頓して、少しも息むことを得ず。食飲すること能わず、又た渴飢せしむ。窮山に死するは、實に其の命に非ず。

この文も確かに歸有光の「女三墳誌」と同様、韓愈が夭折した娘を回想するという形で書かれているが、その内容は、娘の病苦、韓愈の左遷、娘との離別、家族の巻き添え、娘の苦難とその死、といった具合に、娘の不幸の連續を描いている。そして亡くなった娘を、後悔とともに追想する。つまり、「過去の不幸」が「遺恨」となる形である。それ故、我々がこの文で心を動かされる場合、彼の娘の不幸に對する直接的な同情が中心となり、美しい抒情などではなく、悲痛な抒情をそこに讀み取ることになる。

これに對し、歸有光の場合、「寒花葬誌」にせよ、上で見てきた他の作品にせよ、客觀的な手法で書かれる回想部

分は、殆ど幸福であつた時點を記すものである。この場合、「過去の幸福」は「喪失の悲しみ」になる。これが、その抒情の基礎となり、儚く悲しい抒情を生み出すことになるのである。

歸有光の以上のような手法は、他のジャンルの作品にも見られる。

「壽序」に於ける例を舉げてみよう。壽序は元々、人の長壽を祝う文であるが、長壽の説明からその人の平生に話が及び、一種の傳記の性質を帯びることがあり、その場合にも以上のような手法が用いられることがある。「周弦齋壽序」卷一三を採る。

「周弦齋壽序」は周果、字弦齋の八十歳の誕生日を祝すべく作られたものである。先ず冒頭、弦齋が有光の母の實家の教師であつたことが述べられた後、續いて少年時代の歸有光の思い出が述べられる。

余、少き時、吾が外祖の先生と遊處し、及び吾が諸舅兄弟の先生に従いて遊するを見たり。^㉔

先ずここで弦齋と外祖父や伯父、從兄弟たちとが、回想

の中で時間的に結び付けられる。

今、先生の老にして強壯なること昔の如く、千墩浦上を往來し、猶お能く歩行すること十餘里なるを聞く。^㉕

次に時間は、歸有光がこれを書いている現在に戻り、壽序本來の趣旨である弦齋の老にして壯である様子が描かれ、弦齋においては曾ての壯健な状態が續いていることが示される。

余 外氏の江南從り來るに見え、言 先生に及ぶ毎に、未だ嘗つて少時の母家の室屋井里、森森如なりて、周氏の諸老人の厚德、渾渾如なりて、吾が外祖の先生と遊處すること恂恂如なりて、吾が舅若び兄弟の先生に従いて遊すること斷斷如なるを思わずんばあらず。^㉖

現在でも母方の親類に會うというきっかけによって、歸有光は再び回想に入る。そこでは、母の實家の家屋は盛んに立ち並び、弦齋と外祖父や伯父、從兄弟たちとが樂しげに暮らしている、という幸せな状況である。

今 室屋井里は復た昔時に非ず、吾が外祖、諸老人の存する者は無し。^㉗

しかし、その直後に再び歸有光は現在に跳躍する。その現在では、家屋は舊時を留めず、外祖父や伯父、従兄弟たちは既に鬼籍に入り、歸有光は幸福ではない。

ここにおいても、歸有光の意識の対象は弦齋よりはむしろ、自分にとっての事態の推移へと變化してしまっている。老いてなお元氣な弦齋の壽序を書くことは、弦齋にとっては言祝ぐべきことである。しかし歸有光にとっては、歸有光の記憶の中で弦齋と結びつけられていた外祖父ら、歸有光にとって大切な者たちが失われてしまったことを、強く思い起こさせられる行爲となっている。そして我々は弦齋の長壽のめでたさではなく、歸有光の幸福な時代の喪失を強く印象づけられる。つまり、ここで歸有光は弦齋の長壽を題材に採りながら、實は自己の想念を巧みに表現していると言える。

續いて、弦齋の長壽を賀す定型の祝辭が述べられ、弦齋の名、字等が述べられて終わる。一篇を通じての弦齋の事跡は、全て歸有光個人に結び付けうるものばかりで、弦齋自身のことについては、實は殆ど語られていない。そもそも

も歸有光は「余雖不見先生久、而少時所識其淳朴之貌、如在目前（余先生に見えざること久しと雖も、少時識る所の其の淳朴の貌、目前に在るが如し）」と、現在の弦齋のことは、人聞きに知るのみであつて、長年會つたこともない人物に關して文章を書いているのである。

＊

以上のことを踏まえて最高傑作と言われる「項脊軒記」（卷一七）を検討してみよう。「項脊軒記」は清代の古文家、王拯が『龍壁山房文集』卷一「書歸熙甫項脊軒記後」に

往時、上元梅（曾亮）先生京師に在りて、邵舍人懿辰の輩と過從し、文を論じて最も懂び、而して皆熙甫の文を嗜む。梅先生嘗つて舍人と余に謂いて曰く「君等熙甫の文を嗜むに、孰か最高となすか」と。余と邵と舉ぐる所輒ち符し、聲應じること響くが如し。蓋し項脊軒記なり。乃ち大笑す。²⁹

と記して最も評價する、歸有光が少年時代からの思い出の残る項脊軒について記した抒情的な作品である。

「項脊軒記」は、二つの部分に分かれる。

十九歳の時に書かれた前半部分では、まず居心地のよい項脊軒の説明、次にそこでの少年時代の「喜ぶべきこと多けれど、亦た悲しむべきこと多し」という数々の思い出が述べられる。それは今は亡き母を語る老嫗の姿であり、十五歳の自分に大きな期待をかけてくれた祖母の姿である。

そしてその直後に「瞻顧遺跡、昨日。令人長號不自禁（遺跡を瞻顧するに、昨日に在るが如し。人をして長號、自ら禁ぜざらしむ）」と、第一の時間の跳躍により悲しむ形を見せる。この後「太史公曰」に倣って「項脊生曰」として蜀清、始皇帝、劉備などと比較し、自らを「埤井の蛙」などと譬えて文が終わる。

次に、後半部分。この部分、恐らくは三十七歳頃に付け加えられたものである。³⁰ 以下全文を引用する。

余既に此の志を爲して後五年、吾が妻來歸す。時に軒中に至り、余に従いて古事を問ひ、或いは几に憑りて書を學ぶ。吾が妻歸寧し、諸小妹の語を述べて曰く「姉が家に閤子有りと聞く。且つ何にか閤子と謂うや」と。其の後六年、吾が妻死す、室壞るるも修せず。

其の後二年。余久しく病に臥して無聊なり。乃ち人をして復た南閤子を葺せしむ。其の制、稍や前に異なる。然れども自後、余多く外に在り、常には居せず。庭に枇杷の樹有り、吾が妻、死するの年、手ずから植えし所なり。今は已に亭亭として蓋の如し。³¹

「余既に此の志を爲す」この部分では、十九歳の歸有光が「遺跡を瞻顧」して回想して書く記述それ自體も、實は過去のものだったという、いわば種明かしがなされる。

さらにその後、時間の跳躍を行う。「後五年」して、少年だった歸有光も妻を娶り、項脊軒には妻との新しい愛すべき思い出の数々が付け加わる。しかし「其後六年」して妻は死に、思い出の項脊軒は荒れる。「其後二年」再び項脊軒を修理するが、その項脊軒はもう曾ての思い出の項脊軒とは異なったものとなってしまふ。

その後、思い出の薄れに従うかのように、歸有光は項脊軒から離れる。しかし、氣がつけば、そこには妻の死後もその思い出を刻み續けて成長する枇杷の木だけが残る。そして、流れ去った月日を象徴し、既に枇杷の木は十分大き

い。

ここで記されるのは、まず過ぎ去った思い多き少年時代の喪失であり、それにかぶさる形で愛する妻との幸福な時代の喪失である。そしてそれを生み出す時間の積層は「後五年」「其後六年」「其後二年」「今」と明確且つ大きい。この「余既爲此志」以下の部分が付け加わったことにより、「項脊軒記」の主題は、項脊軒自體から今は亡き妻に、より多く移ってしまっていることには注意したい。

しかも、この文は「余既爲此志」以下は十數年後に書き加えられたものであるため、それ以前の部分の執筆時には、當然妻の死という事實は作者の意識に上っておらず、幸福であつた少年時代のみが極めて純粹に表されることになり、先に考察した喪失の悲しみがより強く表されるという効果が生み出されている。

こうしてみると「項脊軒記」は、成程歸有光らしい要素を備えた名作と言える。

前述の王拯は、この部分に關して、字數まで數えて次のように述べる。

歸有光の文學（田口）

按ずるに文「余、既に此の志を爲す」の後百十四字は、文を記せし以後十餘年の事を歷敘し、語、尤も悽愴。^②

*

以上見てきたような性質をもつ作品は、勿論様々な形式、内容を持つ歸有光の文學の典型に過ぎない。しかし、實は、以上で擧げてきた歸有光の作品は、いずれも『古文辭類纂』に採られる歸有光作品三十二篇に含まれるものばかりである。姚鼐の歸有光評價の問題ともからんでくることだが、上述のような性質をもつ作品の歸有光の文學の中での重要性を伺うことができるはずである。

抒情の背景

さて、歸有光の作品で、失われた過去への關心の強さ、しかもそれが多く幸福な時代であることは、特徴的であつた。では何故彼は例えば娘の死を描く場合でも、そのように幸せな時代を中心に描くのか。

問題を直ちにそこに進める前に、まずその特徴的な例である「寒花葬誌」「女如蘭壙誌」「女三壙誌」など、娘或

いは召し使いに對する碑誌文の文學史的意味を考えてみよう。

まず、前段ではこれらを連續して引用したが、文學史的に見ると、實はこれは稀な例であることには注意しなければならぬ。確かに、清の郭麐『金石例補』卷二には

後、韓・柳、女挈・下塲の女子の銘記は、皆な自ら之が辭を爲す。其の體例、漸く廣がれり。^③

と記され、韓愈、柳宗元には、それぞれ「女挈壙銘」、「下塲女子墓塋記」といったもの、また宋代でも王安石に「鄞女墓誌銘」、曾鞏に「二女墓誌」などの作品は見られる。^④

しかし、例えば明代に入ってから歸有光以前の文人、楊維禎、宋濂、劉基、貝瓊、蘇伯衡、高啓、方孝孺、吳寛、王守仁、唐順之の文集（いずれも四部叢刊にて調査）には一例として娘、ましてや召し使いに對する碑誌などは残されておらず、これが決して一般的とは言えない形式であることが分かる。

詩の分野では、娘の死が傳統的に表現されてきていることから分かるように、これは娘の死が悲しくなかったと

いうことではなく、娘はそれまで碑誌というジャンルの扱う對象外であったためだと考えるべきである。

先に見たように、そもそも婦女、ましてや子供であれば、書くべき逸話など多くはないはずであり、そこにわざわざ慣例に反して、二篇（「寒花」の例も含めれば三篇）も碑誌を記すというのは、それなりの理由をここに見て取らなければならない。

ここに挙げた三篇、成立年代は各作品中に示され、「女如蘭壙誌」が一五三五年、歸有光三十歳、「寒花葬誌」が一五三七年、三十二歳、「女二壙誌」が一五三九年、三十四歳、いずれも非常に近い時期に書かれたものである。當時の歸有光は一體どの様な状況に置かれていたのか。

*

吳中における歸家は相當な名家であった。

歸氏は世世縣人の服する所と爲り、時人之が爲に語りて曰く、「縣官の印も、歸家の信に如かず」^⑤（「歸氏世譜後」卷二八）

しかし、歸有光の世代には

歸氏、有光の生まるるに至りて、日び益ます衰う。^②

「家譜記」卷一七

と次第に没落の傾向を見せる。これは、歸家が科擧合格者を出さなかったことに由來する。清の乾隆期、安亭江の人孫岱による『歸震川先生年譜』（以下『孫譜』と略す）に記載される歸氏系圖を見ると、洪武六年に歸有光の七代前、歸子富により歸氏が崑山に移つて來て以來、庠生となつたのは有光の父歸正、叔父の歸中、歸準、有光の弟、歸有功の四人、擧人は曾祖父歸鳳が成化十年南京鄉試に合格したのみ、進士及第者に至つては十一代に互る「歸氏世系表」中、後の歸有光の合格まで記されていない。

それ故、歸家の期待は、五、六歳にして早くも朱子や蘇軾の書を読む（送王子敬之任建寧序）^③卷十、「跋小學古事」^④卷五）英才、歸有光に寄せられることとなつた。

有光七歳、……孺人中夜、寢より覺め、有光に促して孝經を暗誦せしめ、即ち熟讀して一字も齟齬すること無ければ、乃ち喜ぶ。（先妣事略）^⑤卷二五）

という母、周氏の、熱心な教育ぶりもあり、歸有光は、

「九歳にして、能く文章を成し、童子の好無し」^⑥（明太僕寺丞歸公墓誌銘）といった成長を見せる。

そして「項脊軒記」に書かれる有光およそ十五歳の頃の記述は、次のようである。

余、束髮より軒中に讀書す。一日、大母、余を過りて曰く「吾が兒、久しく若の影を見ず。何ぞ竟日黙黙として此に在るや。大いに女郎に類たり」と。去るに比^{およ}び、手を以て門を闔じ、自ら語りて曰く「吾が家讀書するも久しく效あらず。兒の成る、則ち待つべきか」と。之を頃^{ほど}くして、一の象笏を持して至りて、曰く

「此れ吾が祖太常公、宣徳の間此れを執りて以て朝す。他日、汝當に之を用うべし」と。^⑦

「太常公」とは歸有光の祖母の祖父、夏昶のことで、永樂年間の進士である。つまり、優秀な少年であつた彼には、科擧合格の強い期待がかけられたのである。そして科擧への合格は、彼にとつて亡き母や家族の期待にこたえる重要な課題として残り續ける。このことは、以後彼が明代の文人としては、異例の高齡の六十歳になるまで會試を受け續

けることから裏付けられる。

しかし、一五二五年、歸有光は二十歳で蘇州府學生員になったものの、その後連續して郷試に失敗し、彼の家は困窮する。こうした状況下、一五三三年十月、魏氏が亡くなる。魏氏は自らの師、魏校の従女であり、また彼のよき理解者であつた。

先妻少きより富貴の家に長ずるも、來歸するに及び、澹薄に甘んじ、親自操作す。……嘗つて有光に謂いて曰く「吾れ日び君を觀るに、殆ど今世の人に非ず。丈夫當に自立すべきに、何ぞ目前の貧困を憂えんや？」^④

〔請勅命事略〕卷二五

魏氏がかくも苦勞したのは、歸有光の試験勉強のためであつて、妻にこのような貧困な思いをさせてまで舉子業に打ち込みながら合格できなかった後ろめたさ、また自分のよき理解者を失つた悲しみが、彼を襲つたに違いない。

そして彼は落第を續ける。魏氏の死の翌一五三四年、四回目の郷試失敗。その翌年に「女如蘭壙誌」が書かれる。

一五三七年、五回目の郷試失敗、その年「寒花葬誌」が書

かれ、まだ合格を果たせぬ一五三九年、「女三壙誌」が書かれる。

要するに、娘や召し使いに對する碑誌という、文學史的に一般的とは言えない形式の作品が書かれた裏には、單なる娘や召し使いの死という不幸の外に、最愛の妻の死、度重なる受験失敗、優秀な學生としての自己の喪失といった現實世界での不幸が、背景として存在したのである。

即ち、歸有光がこれらの作品を執筆するのは、單に娘に對する哀悼からだけではなく、自らの現在の不遇によつてますます明瞭になる、娘や召し使いの生きていた幸福な過去とのギャップがあればこそだと考えるべきだろう。

では、そのギャップはどれ程大きいものなのだろうか。無論、娘や寒花の生きていた幸せな時代とのそれであるのだが、とりわけ「寒花葬誌」ではっきりと示される十年前という時點を考えてみよう。

寒花の死の十三年前、「明太僕寺寺丞歸公墓誌銘」によれば、歸有光は、

弱冠（一五二五）にして盡く六經、三史、大家之文、

及び濂、洛、關、閩の説に通ず。邑に吳純甫先生有り、熙甫の爲す所の文を見、大いに驚き、以て當世の士、此れに及ぶ者無しと爲す。是れより名、四方を動す^④。と世間的に高い評價を得、一番の成績で蘇州府學生員となる。

そして「十年前」。二十三歳（一五二八）、魏氏が嫁いで來（「寒花葬誌」）、翌年には娘も生まれるという幸せな状況が訪れる。（「先妣事略」）

この時期、歸有光は餘裕のある生活をしている。『孫譜』二十六歳の記述によれば、

同學諸人と文社を結す。時に縣中に南北兩社有り。先生、同舉せられ、毎晨に起き南社に赴き、午後北社に赴く。文を外に著し、飲酒談論し、綽然として餘裕有り^④。

また翌年の記事によると、

同縣の俞仲蔚と交わりを定む。時に崑山三絶と稱す。謂らくは先生の古文、仲蔚の詩歌、張子賓の制藝なり^⑤。とまさしく得意の絶頂である。つまり「十年前」とは、

歸有光の文學（田口）

文中に記される寒花や妻と過ごす幸福な時代であるとともに、世間からも認められ、將來を囑望された優秀な青年として「餘裕」ある生活を送る、自己の幸福が溢れた時代であつたのである。そしてその十年後には、歸有光はそのいづれをも失う。

こうしたギャップを明白にするために書かれるのは、幸せな過去であるべきで、不幸な過去であつてはならない。それ故、彼は、亡き妻を思い起こして「寒花葬誌」を書いているが、その内容は妻が死んだという不幸（これは四年前）を記すのではなく、十年前の「自分の」幸福な状況を記す。「女三墳誌」では自分を慕う二二の愛らしい姿を描き、二二の死を聞かされた自分の不幸に對應させ、「女如蘭墳誌」では自分を呼ぶ如蘭の姿を描き、如蘭を抱くことしかできなかった自分に對應させているのである。

歸有光の意識は、何故過去の幸福に向かうのか。つまり、彼にとってこれらの文學作品執筆の動機が、繰り返すが、人々の死に對する哀悼よりむしろ、家族との幸福な生活を含めた、自分自身の幸福の喪失の悲しみにあるからである。

先に見た客観性が高く、失われた過去への追慕という特徴をもつ作品の成立には、こうした背景があった。もちろん、彼が前段に見たような構造をもつ文學を作り上げたのは、このような傳記的事實に基づく、というように原因・結果として言うことは出来ないが、彼の抒情性の高い散文を生み出した要素として相關を見るのは決して無益なことではないだろう。

二 唐順之の作品の性質

さて次に「唐宋派」の代表として唐順之の作品を検討してみよう。

まず端的に分かるのは、歸有光との作品ジャンルの違いである。

先に歸有光は抒情的な傳記作品が特徴的だと述べたが、そもそも彼の文集中、傳記の占める割合は高く、『震川先生集』三十卷、四百九十二篇の中、十卷、百十五篇が墓誌銘、行狀、傳などにあてられている。また『古文辭類纂』に多く採られるもう一つのジャンル「記」まで含めると、

更に三卷五十七篇が加わる。

これを唐順之と比較してみると、彼の場合『重刊荊川先生文集』⁴⁶卷一から四までの詩の部分を除いた残り十三卷、三百五十餘篇の中、三卷、篇數から言えば全體の七分の一弱の四十八篇が、傳記に相當の墓誌銘、行狀、墓表、傳にあてられているだけ、「記」を考慮しても、一卷二十二篇が加わるだけである。勿論以上のような比較は、その別集の成立過程が關係してくるため、一概には言えないが、大まかな方向を示すものとは、とれるだろう。

文集における作品ジャンルの割合は、選集においても同様で、『明文授讀』に採られている作品を見ると（『古文辭類纂』は唐順之の作品を全く採録していないため、比較出来ない）、歸有光が全十一篇中、五篇が傳記、それに對し唐順之の場合、全十九篇中、傳記は三篇に止まる。實際、彼の文集で最も大きな紙幅を占めるのは、卷五から九の「書」百四十七篇であり、その中には彼の文學主張などが詳細に記される。

書や論の文を中心とした作品群をもつ作家と、歸有光の

ように敘事の文を中心とした作品群をもつ作家では、當然その文學者としての評價のされ方も變つてこよう。

では、唐順之の敘事の文、例えば墓誌で優れているとされるものは、どのようなものであつたのか。『明文授讀』で採られる唐順之の墓誌は、「吏部郎中薛西原墓誌銘」「吏部郎中林東城墓誌銘」「都督沈紫江先生墓碑記」（共に文集卷一四）といずれもかなりの社會的地位を得た者の傳記である。そこでは細かなエピソードよりは、公的な活動の跡が中心に書かれており、歸有光のように身近な對象を抒情的に記すといった趣のものではない。このような作品が唐順之の墓誌の代表的作品とされているのである。

彼に歸有光のような作品を書く機會がなかったわけではない。例えば二十四歳の時には、母任氏が亡くなり、三十八歳の時には、王立道に嫁いだ妹が亡くなり（卷一五「王冢婦唐孺人墓誌銘」、四十一歳の時には、弟正之の妻王氏が亡くなり（卷一五「弟婦王氏墓誌銘」、四十二歳の時には、妻莊氏が亡くなり（卷一五「封孺人莊氏墓誌銘」、四十九歳の時には、父珪が亡くなっているが、そこで書かれる作品

は、多く死者の生前の事跡をきちんと示すもので、歸有光のように細部にこだわったものではない。

では、どうしてこのような傾向が生じたのか。そもそも唐順之は應酬の文學や、名も無い人物に關する墓誌などに關しては、否定的であつた。

近來應酬の文字、毎に敢えて作さず（文集卷五「寄黃士尚」）

或いは意到る處一兩詩を作し、及び世縁の已むを得ずして一兩篇の應酬の文字を作すと雖も、率ね鄙陋にして一も觀るに足る者無し（文集卷六「答皇甫百泉郎中」）^④
其れ屠沽細人に一碗の飯喫する有らば、其の死後、則ち必ず一篇の墓誌有り。……生して飯食し、死して棺槨の缺かすべからざるが如し。此の事特だに三代以上に無き所に非ず、唐漢以前と雖も亦た絶えて此の事無きなり（文集卷六「答王遵嚴」）^⑤

このような文學觀を唐順之がもっていたとすれば、彼の文集に自分の子供、或いは召し使いなど「細人」に對する墓誌が存在しないのも頷け、また傳記においても出来るこ

となら、社會的に果たした役割、事跡を描こうとしたことも想像に難くない。

つまり、唐順之はその作品において、歸有光作品が評價を受けているような私小説的な事柄を記すのには躊躇があり（或いは思いつきもせず）、その結果歸有光とは異なったジャンル構成を持つ作品を生み出すことになったのである。そして、ジャンルの違いは文學性の違いに當然結び付き、歸有光と唐順之の文集から受ける印象は、聊か異なったものとなるのである。

三 二つの系譜——在野の文學と官人の文學

では、兩者の文學的立場の違いはどうして生じ、そして何故、後に歸有光の作品が廣く受容されていったのか。それを考える前に、歸有光と同時代の他の文學者との状況の違いを考察してみよう。

當時、文學主張を掲げて活躍した古文辭派の成員、或いは唐順之らを考えてみると、いずれも進士となり活躍した官僚であるということが分かる。例えば古文辭派の李夢陽、

何景明、王世貞、李攀龍などは何れも、部郎及び中書舍人であるし、我々が今問題とする唐宋派と概念的に近い「嘉靖八才子」は、

時に「嘉靖八才子」の稱有り、束及び王慎中、唐順之、趙時春、熊過、任瀚、李開先、呂高を謂うなり〔明史〕卷二八七陳東傳^⑤

時に四方の名士、唐順之、陳東、李開先、趙時春、任瀚……の輩、咸な部曹に在り。慎中、之と講習し、學大いに進む〔明史〕卷二八七王慎中傳^⑥

というように、地域的な集まりではなく、京師での王慎中、唐順之を中心とした官僚同士のサークルであったことが分かる。政治に携わるこのような立場にあった場合、その關心の對象は、議論、公的な事跡に向く傾向をもつのは當然であろう。

唐順之は、嘉靖八年二十三歳で進士となると、二十七歳で翰林院編修と順調に出世を續ける。後、政治的な問題から、二十九歳から五十二歳まで、間に一年ほどの春坊の官となるのを除き、家居を餘儀なくされるが、その間、王慎中、羅

洪先ら友人との往來は絶えない。五十二歳で、倭寇制壓の爲、兵部郎中の身分で官に復歸、五十四歳で客死を遂げる。

二十年以上、家居をやむなくしているのであるから、状況的には一見歸有光に近いように思われる。しかし、既にその交わる場所は進士及第以後の友人が多く、常に官界の情報も入っていた。四十三歳の時には、王愼中ら友人の力により文集も出版され、六年後には南京にて増刷されるに至る。このような公的な生活世界で暮らしていたことが、その作品ジャンルにも先のような傾向となつて表れたと考えられる。

さてここで、我々の参考となる、これとは別の文學者の在り方が、特に明代江南にはあつた。『市隱』と呼ばれる、市民文化の推進者達がそれである。彼らは官途から何らかの理由で離れ、「そのまま蘇州の土着人となつて、自己の好むまま讀書三昧、藝術三昧に耽つて閑靜な生涯を送ろうとした」(宮崎市定「明代蘇松地方の士大夫と民衆」⁵³)ものたちと定義できる。その代表的存在としては「吳中四才子」と呼ばれる祝允明、唐寅、文徵明、徐禎卿がおり、例えば祝

允明、唐寅は舉人とはなるが進士は諦め、文徵明は舉人さえならず、祝允明は書、唐寅は畫によつて主に収入を得、また詩文を製作した。

彼らの文學主張は、その地域性と政治的地位の低さから、廣範圍での文學集團の形成には結びつかず、また彼らの文學に對する取り組み方は、少なくともその題材の取り方において、官人の文學に比べて柔軟性をもつた。唐寅は、

其の世に應ずるの詩文に于いては、甚だしくは意を措かずして曰く「後世の我を知るは此に在ざるなり」⁵⁴

(『唐伯虎全集』、唐伯虎軼事卷一、引『江南通志』)

というように粗忽に墓誌などの文を書き、また巨大なノートに自らの文を書き付け「利市(好い商買)」と呼んだ(『日知錄』卷一九「作文潤筆」)ように臆面もなく賣文を行った。彼らのこうした文學に對する取り組み方は、唐順之のように墓誌を忌避する態度とは好對照をなす。

さて、ここで興味深いのが、四才子の一人として、他の三人と深く交流した徐禎卿である。祝允明、唐寅らが、吳下で自由な活動を行っていたのに對し、徐禎卿は、この四

人の中で唯一、弘治十八年に進士となると、

既に登第し、李夢陽、何景明と遊し、其の少きときの作を悔い、改めて漢、魏、盛唐に趨く^⑤〔明史〕卷二八

六徐禎卿傳

というように文學方針を變え、「前七子」の仲間入りをするのである。そして、彼が京師に行つて以後の作品には、政治的な作品が見られるようになる^⑥。

徐禎卿、七子らの場合と違い、王慎中、唐順之らの場合と違い、明代で文學主張を行う具體的な文學集團を以て活動したのは、官人であることには注意しなければならない。つまり、官界にある作者と在野の作者では、文學に對する態度、例を挙げれば社會的地位の無い者の墓誌を作ることの是非も、異なっていたという事である。

歸有光は、進士合格が六十歳と遅く、それまでは郷里で塾教師として生活しており、彼らのように科舉合格への志を捨てた譯ではないが、結果として「數十年中、屏居野處^⑦」といった状態であつた。もちろん、書畫の才がありむしろ藝術家として華やかな生活を送つた唐寅らと歸有光を

同一視し、「市隱」とするのは問題があろう。しかし彼らと同様、歸有光の活動の中心は在野であり、墓誌や壽序から得る収入も、かなりのものがあつたに違いない。歸有光は、當然文學主張を以て黨派を形成することは無く、その作品に於いては、自分の身近なものを題材にとつた、唐順之であれば忌避するような事柄についても、比較的自由に敘述を行うことができた。そのことによって先に見たような文體は作り上げられたのだらう。

そして、唐順之の「本色」の説が後にはそれほど顧みられなくなるように、理論としては常に色あせる運命にある文學主張とは對照的に、歸有光の文章は、當時は價値のあるものとして顧みられなかつたとしても、身近な親近者への情愛といった誰しもある個別的感情を、普遍的な形で表現することに成功したために、後代に受け繼がれてゆく作品となり得たのだと考えられる。

四 「唐宋派」概念の再檢討

さて、これまでの文學史では、このように趣を異とする

文學者が、「唐宋派」としてまとめられているのだが、この「唐宋派」とは何に基づくものなのか。

だが、この「唐宋派」という文學流派の出典を調べてみると、意外なことにはつきりしない。これまでの先行論文でも「所謂「唐宋派」⁵⁵」などのように使用されるが、その基づくところを明らかにしたものは見られない。

この「唐宋派」という言葉は、管見の及ぶ限りでは、古城貞吉『中國文學史』（一八九七年）の目次部分に「唐宋派と模擬派との對立」とあるのが最初であり（本文部分では「唐宋派」という語は使われていない）、それ以前の中國の文獻に「唐宋派」の文字を捜し當てることは、まだできていない。現在出版されている工具書『辭源』『大漢和辭典』『漢語大詞典』などではこの語を採録しておらず、『辭海』（一九九九年版）『中國大百科全書（中國文學Ⅱ）』などでは「唐宋派」の項は設けるが、その出典は明らかにしていない。このことは、「唐宋派」という言葉が現代では人口に膾炙しているが、初出の確認という點では困難を伴うことを示していると思われる。

歸有光の文學（田口）

そもそも中國において、ある文學集團が「……派」というかたちで呼稱されるのは、ヨーロッパの文學觀の影響を受ける以前ではそれほど一般的ではなかったようである。確かに「江西詩派」のように「派」を使用した文學流派もあるが、それは唐の「王・楊・盧・駱」「李・杜」、明代で言えば「李・何・王・李」といったように人名を並べたものや、「竹林七賢」「初唐四傑」「吳中四才子」といったように數字でまとめたもの、或いは「元和體」「西崑體」といったように詩風によるもの、で文學流派、集團を表すものの多さに較べれば、一般的であるとはいえない。更にこの「……派」の使用例も、地名が冠せられる場合が殆どで、「唐宋派」のように目標とすべき文學對象を冠する例を、私は傳統的な中國の文獻に今のところ發見できていない。この論文で屢ば用いる「古文辭派」についても、實はこうした事情は同様である。

恐らくこのように文學的志向を冠した「……派」というかたちで、明確に文學流派が意識されるのは、文學史の概念が導入されて以後、即ちヨーロッパの歴史主義の影響を

受けて文學が捉えられるようになって以後のことではなかったかと推察される。具體的には既に述べた古城貞吉『中國文學史』より始まり、その後、様々な中國文學史が書かれていく中で、「唐宋派」を含めた諸文學流派が定義され一般化していったのではないかと思われる。

というのも、近代以後に出版された中國文學史の諸本に於ける「唐宋派」の取り扱いを辿ってみると、つぎのような事實に氣づくからである。一八九六年に古城貞吉が『中國文學史』を著して以後、陸續として中國文學史が書かれるが、その後暫くは必ずしも「唐宋派」という言葉は一般的でない。中國人の手による初期の中國文學史、林傳甲『中國文學史』（一九〇四年脱稿）、張德瀛『中國文學史』（一九〇九年、廣東法政學堂出版、上海圖書館藏）、黃人『中國文學史』（一九〇九年以後刊）では、唐宋派、古文辭派といった言葉はなく、そもそも「……派」という概念は殆ど使われていない。そして、それに續く時期に書かれた兒島獻吉郎『支那文學史綱』（一九二二年）でも

説者或は彼を王慎中、唐順之に比して嘉靖の三大家と

稱し、また或は彼を宋濂、方孝孺、王守仁、王慎中、唐順之に並稱して明の六大家と爲せり。（同書、三三三—三三四頁）

というように「唐宋派」という概念は用いられていない。もつとも、ここではほぼ「唐宋派」と同じ成員を「嘉靖の三大家」とまとめているが、その後半で年代、作風を異にする六人を「明の六大家」と記すことから分かるように「嘉靖の三大家」は、ほぼ同時期の代表的な文學者を並稱したものだと考えられ、文學流派を直接表すとは言いい切れない。實はこの「嘉靖の三大家」もその來歴のよく分からない言葉であるが、この三人をまとめて考える動きに關しては清代からあったことは後述する。

また、兒島に續く時期に中國人によつて書かれた謝無量『中國大文學史』（一九一八年）でも「嘉靖萬曆文學」の章の第一節の標題として「嘉靖八才子及歸有光之文學」とある（四九頁）だけ（本文には歸有光を他の者とまとめるような記述なし）であり、ここでは『明史』に典據の確認できる王慎中・唐順之ら「嘉靖八才子」と、歸有光とが「唐宋

派」としてまとめられて考えられているわけではない。

その他、顧實編『中國文學史大綱』（東南大學叢書、一九二六年）、など第二次大戰以前に書かれた本の殆どでは、「唐宋派」という言葉で歸有光らをまとめた記述は無い。^⑤

さらに、青木正兒『支那文學思想史』（一九三五年）では明代文學の項では、李・何・李・王に與しなかつた文學者全體を「創造派」とし、清代文學の項で初めて侯方域、魏禧・汪琬ら唐宋八家を宗としたものを「唐宋派」と呼び、歸有光をもその中に含めているが、王愼中・唐順之らをその中に含める記述はない。また同作者『清代文學批評史』（一九五〇年）では宋濂を「唐宋派の大家」として挙げ（四頁）、その定義が現在我々が考えるような「唐宋派」と聊か異なっていることを示す。

最近のものでも「嘉靖三大家」という表現を用い「唐宋派」とは記さないものに、例えば葉慶炳『中國文學史』（臺灣學生書局、一九六五年）などがある。

この三人をまとめる記述としては、清代黃宗羲が、彼ら三人を並稱したものが見られるが、歴史的文献で唯一彼ら^⑥

歸有光の文學（田口）

を「派」として捉えている例は、私の見る限り、「唐宋」の名こそ用いていないが、康熙癸丑（一二年、一六七三）に書かれた董正位「歸震川先生全集序」（『四部叢刊初編、震川先生集』所收）、

明三百年、文章の派 一ならず。嘉靖中、唐荆川・王遵巖・歸震川三先生起して之を振う有り。^⑦

とした形だが、我々は既に歸有光が錢謙益の稱揚を受けるまでは、殆ど無名の存在であつたことを知っている。これが歸有光の全集の序であることを考えれば、ここでの「派」とは、それまで「王・唐」と呼ばれた反古文辭のビツクネームに歸有光を付け加え、歸有光を稱揚したものと捉えられる。事實、逆に唐順之側の文集の序には、歸有光とまとめられるような記述は、全く見られないのである。

しかるに、現在出版されている中國文學史の殆どでは、中國、日本を問わず「唐宋派」という言葉は一般的なものとなっており、その一方、この概念設定の根據こそ幾つかのもので述べられてはいるが、この言葉の典據という點では、明示するものはないという状況となっている。

*

しかしだからといって、「唐宋派」という言葉が文學史において、かくも一般的に使用されているのも、決して故無きことではない。

そもそも明代中期における古文辭派の主張は、例えば、『明史』卷二八六、李夢陽傳に「文必秦漢、詩必盛唐」、また王世貞傳に「其持論、文必西漢、詩必盛唐」とあるように、文章に關しては前漢以前のものを規範とするのが、前後七子を通しておおむね共通する動きであつた。⁶⁷⁾

それに對し、「唐宋派」といわれる成員はほぼ同時期に、歐陽修、曾鞏など所謂唐宋八大家を規範として設定し、秦漢の語句の剽窃の文學となつてしまつた古文辭派を批判する。例えば王慎中であれば、『史記』などの秦漢の古文を規範として設定し重視するが、具體的には、

曩には惟だ古を好み、漢以下の著作 取る無し。是に至りて始めて宋儒の書を發し 之れを読み、其の味長なるを覺ゆ。而して曾・王・歐氏の文 尤も喜ぶべし。⁶⁸⁾（李開先『問居集』傳「遵嚴王參政傳」）

或いは、

已に歐・曾の作文の法を悟り、乃ち盡く舊作を焚く。一意師倣し、尤も力を曾鞏に得。⁶⁹⁾（『明史』卷二八七、王

慎中傳）

というように唐宋大家の文章を好んだ事が示される。

また唐順之も同様に秦漢の古文をも評價はするが、自ら韓愈、柳宗元、蘇洵、蘇軾、蘇轍、曾鞏、王安石の選集『六大家文』（三蘇を一家として、六家。實際に残っているのはその弟子蔡瀛による略本『六家文略』⁷¹⁾のみ）を編纂していることから分かるように唐宋古文を推重し、「與洪芳洲郎中」其二（『重刊荆川先生文集』卷七）で、「濟南生文字黃口、學語未成（濟南生、文字黃口、語を學びて未だ成らず）」というように李攀龍を批判した文字も見られる。

茅坤は唐順之の弟子であつて、又『唐宋八家文鈔』を評選しており、古文辭派に與せず唐宋的な古文を目指していたことは明らかである。

さて歸有光は、明確な文學理論に關する著作は残していないが、彼の文集には所々その文學觀的な記載が見られる。

そこでは、

世に韓・歐の二公無くんば、當に何處に従いて之を言うべけんや。⁷²⁾ (別集卷七「與沈敬甫十八首」)

などというように、やはり唐宋八家を評價していた事は分かる。

そして彼が所謂古文辭派に與しなかつたことは、

余 古文辭を好む。然れども世の古文辭を爲す者と合せず。⁷³⁾ (卷一〇「送同年孟與時之任成都序」)

今世 相い尙お琢句を以て工と爲し、自ら秦漢を追わんと欲すと謂う。然れども齊梁の餘を剽竊するに過ぎず。⁷⁴⁾ (別集卷七「與沈敬甫十八首」)

などから伺え、更に具體的には、

蓋し今世の所謂文は、言い難し。未だ始めより古人の學を爲さずして、苟くも一二の妄庸の人を得て之が巨子と爲し、争いて之に附和し、以て前人を詆排す。⁷⁵⁾

(卷三「項思堯文集序」)

と歸有光が述べたのに對し、王世貞が「目我輩爲蜉蝣之撼」(『弇州山人讀書後』卷四「書歸熙甫文集後」)と應えたこ

歸有光の文學 (田口)

などが擧げられる。

しかし、こうした狀況が起きたのは、當時古文辭派の文學者の文體が、あまりに特異であつたからだ、と見る方が穩當だろう。

では、古文辭派の文體とは、どのようなものであつたのか。一言でいつてしまえば、秦漢風なのだが、大まかな傾向として(勿論、例えば王世貞一人にしても、壯年期と晩年期では文體も異なるように、一概には言えないが)、次のようなことが指摘できよう。

1、使用語彙の特殊性(秦漢の典據の多用。他には王世貞、李攀龍らがあれほど頻雜に用い、日本の古文辭派(例えば荻生徂徠)もが屢々用いた一人稱「不佞」は唐順之、歸有光の文章中には、まず用いられない) 2、單字名詞の使用の多さ。3、助字の使用の少なさ。4、動詞を取り除いて目的語となる名詞を動詞的に使用する句法。5、意圖的なリズムの變形など。

目に着いたところで例を擧げれば、

客至而吾釀足於江、釣如之、筍足於竹、蔬茹果蔬足於

竹之旁畝、咏嘯諸譚、箕坐高枕、足於竹之蔭。而客未嘗不得意去也。（四庫全書本『弇州山人四部稿』卷七六

「竹里館記」）

これを普通の文體で書くなら、

客至而吾釀得足於江、釣亦如之、筍足之於竹林、蔬茹果蔬足之於竹旁之畝、咏嘯諸譚、箕坐高枕、足之於竹之蔭影。而客未嘗不得意而去也。

とでもなろう。勿論、こうして書き換えてしまえば、文趣は異なってしまうが、例として考察してみよう。

まず、「足」。最初の部分だけを讀んだだけでは、酒が江より多いのか、江から十分取ることが出来るのか、判斷しづらい。普通の書き方では例文のように書くか「取足於江」「足之於江」と書くところである。次に、「釣如之」だが、リズムと文意から言えば、「亦」があった方が自然である。「筍足於竹」も、そのままでは「筍は竹に十分である」だが、筍は竹林から豊富に採れる、の意味であろうから例文のようにした方がわかりやすい。また、「竹之旁畝」は「竹旁之畝」とした方が、リズムや後の「竹之蔭」との

對應を考慮しなければ、意味がはつきりする。「竹之蔭」は、前の「竹之旁畝」と對の關係にあるとすれば、「竹之蔭影」或いは「竹之蔭下」と四字句にするのが、普通の形である。

といった具合に、普通の説明的な敘述ではなく、故意に人の注意を引きつけるような、硬い文體が、古文辭の特徴であり、こうした書き方は唐宋派の人々はしないのが普通である。例えば、上と同様に竹や花を例に取るなら、唐順之「任光祿竹溪記」卷一三に

餘舅光祿任君治園於荆溪之上、遍植以竹、不植他木。

竹間作一小樓、暇則與客吟嘯其中。

また、歸有光「花史館記」卷一五に

新作精舍、名曰花史館。蓋植四時花木於庭、而度『史記』于室、日諷誦其中、謂人生如是足矣、當無營於世也。

とあるが、別莊の「記」という同じジャンルの作品でありながら、文意はずっと捉えやすい。古文辭派の作家なら、例えば唐順之の「任君治園於荆溪之上」という部分など、

「任君園於荆溪」とでも書き得る所である。

以上のような點から考えてみれば、非古文辭派であつた王愼中・唐順之・茅坤、そして歸有光が「唐宋派」としてまとめられるのも、頷首できる。

とはいえ、ここが重要なのだが、歸有光が古文辭派でなかつたことは、唐順之らに同調し「唐宋派」なる流派を形成したことを、直ちに意味しないことは、はっきりさせなければならぬ。

また、彼が「唐宋派」の語の由來となる唐宋諸家をとリわけ文學の理想としたということも實は言えない。歸有光がとりわけ重視し、文集中で屢々言及するのは、

余 固より鄙野にして、古人の萬分の一も得る能はず。然れども近世の文を爲すを喜まず、性 獨り史記を好む。^⑦（卷二「五嶽山人前集序」）

余 少きより司馬子長の書を讀むを好む。^⑧（卷十七「陶菴記」）

子問必ず史記を挾はさみて以て行く。余 少きより是の書を好み、以爲らく班孟堅より已に盡くは之を知る

歸有光の文學（田口）

能わず、と。^⑨（卷一五「花史館記」）

と言うように「文必秦漢」に相當する漢の司馬遷であつたからだ。歸有光といへば『史記』という見方は明代では非常に一般的のものであつた。例えば彼の死後、最も早期の彼の傳記の一つ、『萬曆重修崑山縣志』卷六にも、「尤酷好太史公書、不忍釋手」とその偏愛ぶりが記され、少なくともその字面から言えば、彼を「文必秦漢」の「古文辭」派として措定したとしても妥當であるように思われる。

*

では、實際には「唐宋派」に相當するような具體的な文學集團はあつたのだろうか。彼らが行動を共にし、集團を作つていたのであれば、以上のような差異も集團内での意見の相違と見なしうるからである。

一般に「唐宋派」の成員として考えられているのは、王愼中、唐順之、茅坤、それに歸有光である。しかし、史書、別集などを検討すると、王愼中、唐順之、茅坤には互いにつながりが見られるが、歸有光はこの三者と直接的な交流は見られず、それどころかむしろ彼ら「唐宋派」と對立す

るはずの派閥、『後七子』の領袖王世貞と親しいつながりがあった。

まず王愼中、唐順之、茅坤それぞれの間に交流があったことは、『王遵巖集』卷一五「唐荆川文集序」、卷三六、三七「與唐荆川」、「重刊荆川先生文集」卷六「答王遵巖」、卷七「與王遵岩參政」、同「答茅鹿門知縣二首」など様々な資料によって裏付けられる。

また彼らの間には師弟關係が存在していた。『明史』卷二八七、王愼中傳には、

王愼中、字道思、晉江の人。……時に四方の名士唐順之・陳束・李開先・趙時春・任瀚・熊過・屠應埈、華察、陸銓、江以達、曾忭の輩、咸な部曹に在り。愼中与之講習し、學 大いに進む。……愼中 文を爲すや、……尤も力を曾輩に得たり。順之 初めは服さず、久しくして亦た變じて之に従う。……卓然として家を成し、順之と名を齊しくす、天下 之を稱して曰く「王・唐」、又曰く「晉江・毘陵」^⑧と。

とあり、王愼中が唐順之に曾輩を主とした古文を教え、そ

の結果二人は「王・唐」と並び稱されるような文學者となつた事が分かる。同時に「王・唐」は單なる同時代の代表的な文學者の並稱以上の、強い流派のつながりを含んだ呼稱であることも確認できる。

唐順之と茅坤との間にもこれに似た強いつながりが確認できる。『明史』卷二八七、茅坤傳には、

坤 古文を善くし、最も唐順之に心折す。順之 唐・宋諸大家の文を喜み、著す所の文編、唐・宋人韓・柳・歐・三蘇・曾・王の八家自り外、取る所無し、故に坤 八大家文鈔を選ず。

というように茅坤が唐順之の影響を直接受けて、唐宋八大家文鈔を編纂するようになった経緯が記される。

しかし、歸有光と彼らの交流の跡を探しても、同じ吳の地方に住んでおりながら、そうした記事は見事なまでに無い。『明史』、『明史彙』と言つた史書には彼ら三者との關係は全く記されておらず、唐順之の別集、歸有光の別集の中には、交流の跡は全く見られない^⑨。

これに對し、「唐宋派」ということから対立關係にあ

つたはずの王世貞との間には逆に交流の跡が見られる。お互いに影響を與え會うような具體的な文學集團が存在したか否かという觀點から言えば、歸有光はむしろ王世貞の集團に屬していたとすら言えることになる。^⑧

そもそも、歸有光はその生前、八股文作家としての名聲はかなりあったようであるが、文學者としての名聲は、それほど高くはなかったようであり、我々が現在彼と併稱して考えるような文學者達の射程には入っていなかったと考えられる。^⑨

李攀龍は「送王元美序」(『滄溟先生集』卷二六)で、王愼中、唐順之の名前をまとめて擧げて非難するが、歸有光には全く觸れておらず、佐藤一郎氏に據れば『滄溟先生集』では三一巻を通して、一度も歸有光には觸れられていない。^⑩ 郭紹虞氏はその論文「明代的文人集團」で、様々な文獻から抽出した、地域・時代等の基準による文學者の並稱を擧げているが、九十四項目にも及ぶ明代の文學者の纏まりの中に歸有光は含まれていない。^⑪

私の調査でも『明史』において、歸有光が並稱されてい

る例は、制藝作家として「歸・胡」とまとめられている一例があるに過ぎない。

歸有光は、その在世中は僅かに制藝作家としての名があったに過ぎず、彼が廣く世に知られるようになるのは、明清初の文壇の盟主錢謙益による紹介以後のことである。^⑫

*

つまり、歸有光は他の著名な文學者達からは孤立した存在であったことが伺われ、「古文辭派」や「唐宋派」なる具體的な文學集團の一員でもなかったことが分かる。従って、「唐順之・歸有光等は「唐宋派」という流派を作って活躍した」など、恰も確固として「唐宋派」というものが實在したかのような記述は適當を欠くことになる。もし、前後七子の文學傾向に與しなかった作家達、というのであれば、「反古文辭派」という名稱を使う方がより適切であろう。

結 論

文學者間の同質性、相違性という問題は、明解な考證が

しづらく、巨視的な感覺的判斷に委ねられる部分が大きい。「唐宋派」というかたちでの理解の仕方は、碩學の先達諸氏の文學理解に基づいたものであり、確かに當時の古文辭派の剽窃の字句を用いた文章と異なっているという點、唐宋諸家風の文をよく學んだ點など、それなりの妥當性をもつものである。しかし、清代に入つて「桐城派」が歸有光のみをその祖とし「唐宋派」をその目標としなかつたこと、現在歸有光以外の作家がそれ程多くの讀者を獲得してないことなどは、單に「古文辭派」と「唐宋派」という二項對立だけでは説明し得ない。

歸有光は生涯を通して士人を志向し續けたという點で、先に舉げた『市隱』達と完全に同一視する譯にはいかないが、「唐宋派」を超えて、「古文辭派」でも「唐宋派」でもない江南における土着の文學的基盤から生まれた作家が存在したという新しい視點を持つことは、これからの明代文學研究に於いて、決して益無きことではないだろう。

注

- ① 「古文辭派」という言葉も、出典不明の言葉（中国では殆ど使われない）であるが、この論文では、「擬古派」「秦漢派」などとも呼称されるこの言葉を、「前七子」「後七子」という實在の文學集團の総称として用いる。注⑤参照。
- ② 使用したテキストは、四部叢刊初編、歸有光『震川先生集』。以下同じ。
- ③ この論争の實在性については、疑問が提出されている。野村鮎子「錢謙益の歸有光評價をめぐる諸問題」（日本中國學會報 第四四集、一九九二）。
- ④ 本論五二頁參照。
- ⑤ 原文「近時文章家、共推歸震川爲第一」
- ⑥ 原文「讀者以震川爲明文第一、似矣」
- ⑦ 原文「歸震川爲明代文章宗匠」
- ⑧ 原文「震川之文、鄉曲應酬者十六七、而又徇請者之意、襲常綴瑣、雖欲大遠於俗言、其道無由。其發於親舊及人微而語無忌者、蓋多近古之文。至事關天屬、其尤善者、不換修飾、而情辭并得、使覽者惻然有隱」
- ⑨ 原文「其中的敘事文、在風格上、崇尚樸素簡潔、反對浮飾雕琢、敘事自出機杼、不惑於羣言、不憚於勢利；在選材上、則多從日常交友、身邊瑣事着筆、給人以清新之感、至於家人父子夫婦之情、感受既篤、入人尤深。」
- ⑩ 原文「試除去其敘事之合作、時文境界、間或闖入。較之宋

景濂尚不能及」

⑪ 叙事とは、陶宗儀「輟耕錄」卷九「文章宗旨」には、「敘事如書史法、『尚書』『顧命』是也。敘事之後、略作議論以結之、然不可多」とあり、議論ではなく、歴史書のようにある物事を選択し、その経緯を記すものと、ここでは定義しておく。

⑫ 原文「從來碑誌之法、類取一二大事書之。其瑣細尋常、皆畧而不論。而夫婦之事、未有不瑣細者。然則竟無可書者矣。就如節婦、只加節之一字而足。其餘亦皆瑣細也。如是而何以爲文乎」

⑬ 原文「豫讀震川文之爲夫婦者、一往深情、每以一二細事見之、使人欲涕」

⑭ 原文「歸震川能於不要緊之題、說不要緊之語、却自風韻疏淡」

⑮ 原文「婢、魏孺人膝也。嘉靖丁酉五月四日死、葬虛丘。事我而不卒、命也夫！婢初膝時、年十歲、垂雙鬢、曳深綠布裳。一日、天寒、蕪火煮茗熟。婢削之盈甌、予自外、取食之、婢持去、不與。魏孺人笑之。孺人每令婢倚几旁飯。卽飯、目眶冉冉動、孺人又指予以爲笑。回思是時、奄忽便已十年。吁！可悲也已！」

⑯ 葬誌とは、鮑振方『金石訂例』卷一「墓誌銘」の項に「唐宋後、又有誌文、壙銘、葬誌、權厝誌、……雖其體大約與墓誌相似、而用各有宜」とあり、形式的にはほぼ墓誌同じもの。

歸有光の文學（田口）

用途の違いは、例えば「葬誌」の使われる他の少ない例、柳宗元の「唐柳先生文集」卷一三「馬室女雷五葬誌」の例と併せて推察するに、地位身分の低いものの場合に、用いられるものであるようである。

⑰ 原文「女二、生之年月、戊戌戊午、其日時又戊戌戊午、予以爲奇。今年予在光福山中、二二不見予、輒常常呼予。一日、予自山中還、見長女能抱其妹、心甚喜。及予出門、二二尚躍入予懷中也。既到山數日、日將晡、予方讀尚書、舉首忽見家奴在前、驚問曰、『有事乎？』奴不卽言、第言他事。徐却立曰、『二二今日四鼓時、已死矣』。蓋生三百日而死。時爲嘉靖己亥三月丁酉。予既歸爲棺斂、以某月日、瘞（原刻誤作「痊」、依周本淳校點「震川先生集」（上海古籍出版社）校改）于城武公之墓陰。嗚呼、予自乙未以來、多在外、吾女生既不知、而死又不及見、可哀也已」

⑱ 原文「須浦先塋之北、纍纍者、故諸湯冢也。坎方封有新土者、吾女如蘭也。死而埋之者、嘉靖乙未中秋日也。女生踰周、能呼予矣。嗚呼、母微、而生之又艱。予以其有母也、弗甚加撫、臨死、乃一抱焉。天果知其如是、而生之笑爲也」

⑲ 原文「今之學震川者、不得其神、而求之於枯淡」

⑳ 呂新昌「歸震川評傳」（人文文庫、二四六九、二四七〇、臺灣商務印書館、一九七九。一〇七一—一〇八頁）「桐城派的疎淡、確實是出於震川先生的」、「桐城文感情不夠豐富」

㉑ 原文「噫、余見翁時、歲暮、……余循去徑還家、嫗・兒

子以遠客至、具酒、見余挾書還、則皆喜。一、二年、妻兒皆亡」

- ②② 原文「城外有橋、余常與中丞出郭造故人方思曾、時其不在、相與憑檻、常至暮、悵然而反。今兩人者皆亡。而延實之樓、卽方氏之故廬、予能無感乎」

- ②③ 四部叢刊初編本

- ②④ 原文「……嗚呼、昔汝疾極、值吾南逐、蒼黃分散、使女驚憂。……我既南行、家亦隨譴。扶汝上輿、走朝至暮。天雪冰寒、傷汝羸肌。撼頓險阻、不得少息。不能食飲、又使渴飢。死于窮山、實非其命」

- ②⑤ 原文「余少時、見吾外祖與先生遊處、及吾諸舅兄弟之從先生遊」

- ②⑥ 原文「今聞先生老而強壯如昔、往來千墩浦上、猶能步行十餘里」

- ②⑦ 原文「每余見外氏從江南來、言及先生、未嘗不思少時之母家之室屋井里森森如也、周氏諸老人之厚德渾渾如也、吾外祖之與先生遊處恂恂如也、吾舅若兄弟之從先生遊斷斷如也」

- ②⑧ 原文「今室屋井里非復昔時矣、吾外祖諸老人無存者矣」

- ②⑨ 原文「往時上元梅先生在京師、與邵舍人懿辰輩過從、論文最懽、而皆嗜熙甫文。梅先生嘗謂舍人與余曰、君等嗜熙甫文、孰最高。而余與邵所舉輒符、聲應如響、蓋項脊軒記也。乃大笑」

- ③⑩ 後記も含めた「項脊軒記」全體の成立年代は、「然自後余

多在外、不常居。庭有枇杷樹、吾妻死之年所手植也。今已亭亭如蓋矣」により、彼の妻魏氏が死んだのが、一五三三（嘉靖二二）年。枇杷の木の成長を考えて、ほぼ一五四二年からあまり遠くない時期と推察される。

- ③① 原文「余既爲此志後五年、吾妻來歸。時至軒中從余問古事、或憑几學書。吾妻歸寧、述諸小妹語曰、聞姊家有閣子、且何謂閣子也。其後六年、吾妻死、室壞不修。其後二年、余久臥病無聊、乃使人復葺南閣子。其制稍異于前。然自後餘多在外、不常居。庭有枇杷樹、吾妻死之年所手植也、今已亭亭如蓋矣」

- ③② 原文「按文餘既爲此志後百十四字、歷敘記文以後十餘年事、語尤悽愴」

- ③③ 郭慶「金石例補」卷二「書童子例」「後、韓・柳、女挈・下場女子銘記、皆自爲之辭。其體例漸廣矣」

- ③④ それぞれ韓愈「女挈壙銘」「朱文公校昌黎先生集」卷三五、柳宗元「下場女子墓塋記」「唐柳先生文集」卷一三、王安石「鄭女墓誌銘」「臨川先生文集」卷百、曾鞏「二女墓誌」「元豐類藁」卷四六

- ③⑤ 原文「歸氏世世爲縣人所服、時人爲之語曰、「縣官印、不如歸家信」

- ③⑥ 原文「歸氏至於有光之生、而日益衰」

- ③⑦ 「送王子敬之任建寧序」卷一〇「余始五六歲、卽知有紫陽

先生、而能讀其書」

- ③⑧ 「跋小學古事」卷五「時方五六歲、先生爲講蘇子瞻對其母太夫人及許平仲難師之語、悚然知慕之」

- ③⑨ 「先妣事略」卷二五「有光七歲、……孺人中夜覺寢、促有光暗誦孝經、即熟讀無一字齟齬、乃喜」

- ④⑨ 四部叢刊本「震川先生集」附「明太僕寺寺丞歸公墓誌銘」

- 「九歲、能成文章、無童子之好」

- ④① 原文「余自束髮讀書軒中。一日、大母過余曰、吾兒、久不見若影、何竟日默默在此、大類女郎也？比去、以手闔門、自語曰、吾家讀書久不效、兒之成、則可待乎？頃之、持一象笏至、曰、此吾祖太常公宣德間執此以朝、他日、汝當用之」

- ④② 「請勅命事略」卷二五「先妻少長富貴家、及來歸、甘澹薄、親自操作。……嘗謂有光曰、吾日觀君、殆非今世人。丈夫當自立、何憂目前貧困乎？」

- ④③ 「明太僕寺寺丞歸公墓誌銘」「弱冠盡通六經、三史、大家之文、及濂、洛、關、閩之說。邑有吳純甫先生、見熙甫所爲文、大驚、以爲當世士無及此者。繇是名動四方」（大家之文及び熙甫所文の記述、「明太僕寺寺丞歸公墓誌銘」の作者王錫爵の文集に實際に收められるものと異同があること、野村鮎子氏前掲論文に指摘があるが、ここでは引用内容に拘わらないので四部叢刊本に姑く従う）

- ④④ 「孫譜」「與同學諸人結文社。時縣中有南北兩社、同學先生、每日晨起赴南社、午後赴北社。著文於外、飲酒談論、綽

然有餘裕」

- ④⑤ 「孫譜」「與同縣俞仲蔚定交。時稱崑山三絕、謂先生古文、仲蔚詩歌、張子賓制藝也」

- ④⑥ 使用したテキストは、四部叢刊初編「重刊荊川先生文集」。以下引用はこの本による。

- ④⑦ 原文「近來應酬文字、每不敢作」

- ④⑧ 原文「雖或意到處作一兩詩、及世緣不得已作一兩篇應酬文字、率鄙陋無一足觀者」

- ④⑨ 原文「其屠沽細人有一碗飯喫、其死後則必有一篇墓誌、……如生而飯食、死而棺槨之不可缺。此事非特三代以上所無、雖唐漢以前亦絕無此事」

- ⑤⑨ とはいえ興味深いのは、彼の文集中には「胡質棺記」（卷一二）（この場合、書籍の装丁職人）「程少君行狀」（卷一五）のように、商人を對象に書かれたものもある。これは、當時江南地方での商業の發達に伴い、商人の力が強まり、士人の生活と密接な關係を持つようになってきたためだろう。

- ⑤① 原文「時有嘉靖八才子之稱、謂東及王慎中、唐順之、趙時春、熊過、任瀚、李開先、呂高也」

- ⑤② 原文「時四方名士唐順之、陳東、李開先、趙時春、任瀚……輩、咸在部曹、慎中與之講習、學大進」

- ⑤③ 「宮崎市定全集」卷一三所收、一九九二、岩波書店。又「アジア史研究」第四（東洋史研究叢刊四一四、東洋史研究會、一九六四）。「史林」三七卷三號。

⑤4 原文「其于應世詩文、不甚措意日、後世知我不在此」

⑤5 原文「既登第、與李夢陽、何景明游、悔其少作、改而趨漢、魏、盛唐」

⑤6 例えは「迪功集」卷一「雜謠四首」。題注に「按此皆紀正德五年八月之變也」。

⑤7 『震川先生文集』卷三〇「祭外舅魏光祿文」

⑤8 例えは「いわゆる唐宋派と呼ばれる人たち」（佐藤一郎「中國文章論」一九八八、研文出版、所收「唐宋八大家文讀本」の成立）八七頁）など。

⑤9 例えは「前後七子」らは、他に「秦漢派」（『明代文學批評史』一九九一、上海古籍出版社など）、「擬古派」など様々な呼ばれ方を文學史上されている。

⑥0 例えは笹川種郎『支那文學史』（帝國百科全書第九編）（一九八八、東京博文館）では、「二、李何七子と李王七子」の「其他の諸子」の項で「李王七子に抗して唐宋の諸家を推重したるもの王遵巖、唐荆川の如きものありと雖も、宋濂と相對して明代の文宗と稱せられるものはを歸有光となす」との記述があるのみで、彼らを一派とは認めておらず「唐宋派」という言葉もない。なお、この中では「派」という言葉は「江西詩派」が使われているのみである。

一八九八年久保天隨『支那文學史』下冊には、「七子の反抗者」の項で「天下之を並稱して王唐といふ。王唐に嗣いで唐宋諸家を崇重せしものを歸有光となす」と記すが、「唐

宋派」という言葉は使われていない。なお、この中では「公安派」「桐城派」「陽湖派」など多くの「派」が使われている。

⑥1 中國最初の「文學史」については、拙論「中國最初の「文學史」は何か」（『颯風』三二號、一九九七）参照。

⑥2 歸有光、正德元年（一五〇六）～隆慶五年（一五七二）。

唐順之、正德二年（一五〇七）～嘉靖三十九年（一五六〇）。因に、王慎中、正德四年（一五〇九）～嘉靖三十八年（一五五九）。茅坤、正德七年（一五二二）～萬曆二十九年（一六〇二）。

王世貞、嘉靖五年（一五二六）～萬曆一十八年（一五九〇）。

⑥3 その他、楊蔭深『中國文學史大綱』（一九三八、商務印書館）、北京大學中文系『中國文學史』（一九五五、人民文學出版社）といった書物の中でも、「唐宋派」は使われておらず、胡懷琛編『中國文學史概要』（一九五九、香港商務印書館）では「同時王慎中・唐順之等別創宗派、以矯何・李之弊」、「在王慎中・唐順之稍後、另有歸有光、他的抒情散文却能自成一家」というように、王慎中・唐順之と歸有光を一つの流派とはしていない。

「唐宋派」を用いているものとしては、陳子展『中國文學史講話』下冊（一九三七、上海北新書局）、復旦大學中文系古典文學組學生集體編著『中國文學史』下冊（一九五九）などがあり、「唐宋派」を使用していないものの、三者をまとめているものとして曾毅『中國文學史』（一九一五、泰東書局）などがある。

⑥4 例えは『南雷文定三集』卷一「鄭禹梅刻稿序」に「當王李

充塞之日、非荆川道思與震川起而治之、則古文之道幾絕」。

⑥5 原文「明三百年、文章之派不一。嘉靖中、有唐荆川・王遵巖・歸震川三先生起而振之」

⑥6 『明史』に記される有名な言葉であるが、具體的に誰の言葉であるのかは、不明。

⑥7 又は李夢陽『空同集』卷六六『論學上篇』に「西京之後、作者勿聞矣」など。

⑥8 王慎中、唐順之らは、決して秦漢の古文を排斥している譯ではない。例えは四庫全書本遵巖集卷九『曾南豐文粹序』

「由三代以降、士之能爲文莫盛於西漢」

⑥9 原文「曩惟好古、漢以下著作無取焉。至是始發宋儒之書讀之、覺其味長、而曾、王、歐氏文尤可喜」

⑦0 原文「已悟歐、曾作文之法、乃盡焚舊作、一意師倣、尤得方於曾輩」

⑦1 王重民『中國善本書提要』四四五頁に見える米國國會圖書館本。その蔡瀛の序に、唐順之が嘗て「六大家文」を編纂したことが記される。

⑦2 原文「世無韓・歐二公、當從何處言之」

⑦3 原文「余好古文辭、然不與世之爲古文辭者合」

⑦4 原文「今世相尚以琢句爲工、自謂欲追秦漢。然不過剽竊齊梁之餘」

⑦5 原文「蓋今世之所謂文者難言矣。未始爲古人之學、而苟得

一二妄庸人爲之巨子、爭附和之、以詆排前人」

⑦6 王世貞の晩年の文は、例えは「其文反覆條暢、亦皆類賦、無復摹秦仿漢之習」(『四庫全書總目』卷一七三王世貞『讀書後』)と言われるように、その趣が變化している。

⑦7 原文「余固鄙野、不能得古人萬分之一。然不喜爲近世之文、性獨好史記」

⑦8 原文「余少好讀司馬子長書」

⑦9 原文「而子問必挾史記以行、余少好是書、以爲自班孟堅已不能盡知之矣」

⑧0 原文「王慎中、字道思、晉江人。……時四方名士唐順之、陳束、李開先、趙時春、任瀚、熊過、屠應埈、華察、陸銓、江以達、曾忬輩、咸在部曹。慎中與之講習、學大進。……慎中爲文、……尤得力於曾輩。順之初不服、久亦變而從之。……卓然成家、與順之齊名、天下稱之曰王・唐、又曰晉江・毘陵」

⑧1 原文「坤善古文、最心折唐順之。順之喜唐・宋諸大家文、所著文編、唐・宋人自韓・柳・歐・三蘇・曾・王八家外、無所取、故坤選八大家文鈔」

⑧2 僅かに歸有光の文集卷二「戴楚望集序」に、「及其(楚望)所交親者、則毘陵唐以德、太平周順之、富平楊子修、並一時海內有道高名之士」また文集卷十九「周孺亭墓誌銘」に「是時天下尤尊陽明、雖荆溪唐以德、始事先生、後復嚮王氏學。惟孺亭稱其師說、終不變」との記載が見られるので、また

この「毘陵唐以德」が唐順之（字應德）であるかどうか、明らかでない。

⑧3 野村氏前掲論文参照。歸有光は嘉靖三十九年に死んだ王世貞の父に「思質王公誄」（文集卷三十、嘉靖四十年頃）を製作している。又、王世貞・世懋兄弟が、歸有光が長興知縣赴任に當たって詩を送ったことが指摘される（『弇州山人四部稿』卷三八「送歸熙甫之長興令」、「王奉常集」卷七「送歸熙甫尹長興」）。

またこれ以外にも、歸莊の注に據れば崑山本の「西王母圖序」（卷二）は、王世貞兄弟の爲に作られたもので、更に尺牘中にも王世貞の名が見られる（別集卷七「與王子敬六首」）。更に歸有光と古文辭派の成員との繋がりも、他にも隨所に見られる。注④5に見える俞允文（字、仲蔚）は、古文辭廣五子の人であるし、「己未會試雜記」（別集卷六）に「予常識之白下」と述べる瞿景淳も王世貞と非常に近い友人である（『弇州山人四部稿』卷八一「瞿文懿公傳」、「弇州山人續稿」卷四一「瞿文懿公續稿序」）。他にも徐中行、陳文燭など数多い。

⑧4 佐藤一郎「歸有光の系譜」（『中國文章論』一九八八、研文出版、所收）

⑧5 同前

⑧6 郭紹虞『照隅室古典文學論集（上編）』、郭紹虞文集之一、上海古籍出版社、一九八三、五一—八頁

⑧7 もっとも、郭紹虞氏は「歸・胡」を歸子慕、胡友信としているが、その部分は「有光制舉義、湛深經術、卓然成大家。後德清胡友信與齊名、世並稱歸・胡」であるから、歸有光、胡友信と考えたほうがよい。

また郭紹虞氏が採り上げていない歸有光を含んだ呼稱例には、更に「明史稟」列傳卷一六三、歸有光傳に「有光少舉子業、與胡友信・楊起元・湯顯祖先後齊名、世以配王鏊・唐順之・薛應旂・瞿景淳所謂八大家也」という記載、他に資料としての一般性には欠けるが注④5に引く「孫譜」に「時稱崑山三絕、謂先生古文、（俞）仲蔚詩歌、張子賓制藝也」というものが見られる。

以上が私がこれまで發見できた記載の全てであるが、一般的な資料では制藝作家としての評價が高く、文學者として並稱された例は、特殊な資料に止まること、又唐順之・王世貞などに比べその数は決して多くないことから、彼は制藝作家としては、當時から評價を得ていたにせよ、文學者としては必ずしも廣く認められてはいなかったと思われる。

⑧8 野村鮎子「黃宗義の歸有光評價をめぐって」（『學林』第一七號、一九九一、「2 錢謙益以前の歸有光評價」参照）

⑧9 例えば『明代諸家散文選（中國歷代散文作家選集）』（一九九四、（香港）三聯書店）王慎中の項に「王慎中、……並且和唐順之・歸有光・茅坤等人形成一個文學流派、號稱唐宋派」など。